

特別支援学校における運動部の現状と課題

～部活動実施状況の調査から～

○熊地 需 武田 篤 藤井慶博
 (秋田県立ゆり支援学校) (秋田大学教育文化学部) (秋田大学教育文化学部)

KEY WORDS : 特別支援学校 部活動 運動部

I 目的

秋田県では国民体育大会を契機とするスポーツ振興と障害者スポーツの底辺づくりのために、平成14年に北海道・東北地方で初めて特別支援学校体育連盟を設立した。当時は、平成17年の全国障害者スポーツ大会「秋田わか杉大会」に向けての選手育成という役割も担っていた。現在本連盟は、障害のある児童生徒のスポーツを通じた社会参加や余暇の充実を図ることを目的に活動を継続してきている。その後、文化活動充実のため、特別支援学校文化連盟も発足し、音楽・美術活動の充実も図られてきている。今回は、運動部に焦点を当て、その現状を明らかにするとともに、成果と課題について検討することとした。

II 対象と方法

平成28年4月に秋田県の全特別支援学校15校(3分校を含む)の運動部を担当する教員各1名を対象とし、部活動に関するアンケート調査を実施した。調査項目は部活動の有無、種類、部員数、練習時間・回数、指導者数及び成果と課題とした。自由記述による成果と課題に関する回答は、内容をKJ法に準じてカテゴリー化し、分析した。カードは全部で121枚となった。

III 結果

部活動があると回答した学校は15校中14校であった。どの学校も部活動に参加できるのは、中学部からとしていた。

1 部活動の種類と部員数 (表1)

部活動の種類と部員数について表1に示した。特別支援学校の部活動として最も多いものはバスケットボール部、次にサッカー部、ユニホック部であった。その他としては陸上、軽スポーツ、フロアバレー、サウンドテーブルテニスがあげられた。部員数は、14校の合計で347人、これは14校の中・高等部生全907人の38.3%にあたった。

2 部活動の練習回数と練習時間 (表2・表3)

練習回数は、週2回が最も多く、次いで週1回であった。また、練習時間については、2時間が最も多かった。

3 指導者の人数

部活動を実施している14校の特別支援学校の指導者数は、合計で235人であった。14校の教職員数の合計が、793人であったことから、指導に当たっている教員の割合は39.6%であった。

表1 部活動の種類と部員数

部活名	部活数	部員数
バスケットボール部	8校	127人
サッカー部	6	95
ユニホック部	6	67
その他	5	58
計	25	347

表2 練習回数 (n=25)

週3回以上	6
週2回	12
週1回	7

表3 練習時間 (n=25)

2時間	18
1時間30分	4
1時間	3

表4 部活動の成果と課題 (n=121)

I 部活動の意義とメリット	
1 心身の健康(31)	1)情緒の安定(8) 2)忍耐力(7) 3)体力の向上(6) 4)自主性(5) 5)技術の向上(4) 6)その他(1)
2 社会性(31)	1)対人関係の向上(15) 2)仲間作り・生涯スポーツ(13) 3)生徒指導(3)
II 課題	
1 運営面(15)	1)練習回数や時間の確保(7) 2)活動内容の検討(4) 3)交流の機会の拡大(2) 4)その他(2)
2 指導者(8)	1)指導体制(3) 2)負担感(3) 3)専門性(2)
3 生徒・保護者(4)	1)本人の参加意欲と保護者の強い思い(4)
III 充実に向けて	
1 校外への働きかけ(16)	1)学校間の交流(9) 2)地域への発信(7)
2 校内の整備(16)	1)指導者の専門性(8) 2)校内の理解啓発(2) 3)校内の練習場所等の確保(2) 4)生徒の動機付け(2) 5)保護者の理解(2)

4 部活動の現状と課題 (表4)

部活動の現状と課題について大きく3つに分類された。1つは部活動の意義とメリット、2つ目は部活動の課題、3つ目は、部活動の充実に向けてであった。部活動の意義・メリットについては、対人関係の向上に加え、情緒の安定や忍耐力の育成、体力の向上など心身の健康が挙げられた。課題については、練習回数や時間の確保、活動内容の検討、交流の機会の拡大などが挙げられた。部活動の充実に向けては、学校間の交流の拡大や地域に特別支援学校の部活動に関する発信を行い理解を図っていくこと、指導者の専門性の向上、練習場所の確保や用具の整備、さらに教職員と生徒に対する部活動への理解・啓発を図っていくことなどが挙げられた。

IV 考察

今回の調査から、秋田県内のほとんどの特別支援学校に運動部があり、4割近い生徒が入部し、活動に参加していることが分かった。練習回数や時間等限られた条件下で、生徒たちは運動のやりがいや楽しさを味わい、各種大会に向けて練習に取り組んでいることが伺えた。部活動の充実に向けては、練習回数・時間や場所の確保、地域への発信等があげられた。また、指導あたる教職員についても専門性の向上や負担の偏りがあげられ、今後の課題とされた。

(KUMACHI Motomu, TAKEDA Atsushi, FUJII Yoshihiro)